

アジア・太平洋研究センター，上智大学アジア文化研究所
イスラーム地域研究拠点グループ2
「東南アジア・イスラームの展開」
共催セミナー

日 時：2010年2月22日（月）・23日（火）

場 所：名古屋キャンパス J棟1階 特別合同研究室

テーマ：東南アジア・イスラーム研究の新しい展開へ向けて

第一部「研究動向と展望」

報 告 者：小林寧子（南山大学）

川島緑（上智大学）

服部美奈（名古屋大学）

司 会：太田淳（中央研究院・台湾）

コメント：青山亨（東京外国語大学）

第二部「研究発表」

報 告 者：光成歩（東京大学大学院）

木下博子（京都大学大学院）

渡邊暁子（東洋大学）

司 会：服部美奈（名古屋大学）

東南アジアのイスラームに関する研究の要請は近年高まっている。イスラームがダイナミックに展開する現実を研究者が捉えられるか、日本の身近なところにいるムスリムとの交流が広いイスラーム世界への理解へとつながるか、いくつもの課題が課せられている。長い間この分野の研究は、ごく限られた研究者の手で進められてきたが、今新しい段階を迎え、若い研究者の育成が急務となっている。このセミナーは、今までの研究蓄積を継承し、新たな研究の地平を開くことを目指して企画された。第一部では、研究動向に関する報告が行われた。古典的文献を批判的に再検討して研究史の中に位置づけると同時に、最近の研究成果をどのように取り込むかを考えた。このようにして研究の可能性を探ったあと、第二部では、東南アジア・イスラーム研究をめざす若い研究者が、従来の研究にない新しい視点からの研究成果を発表した。

第一部「研究動向と展望」

第1 報告

「インドネシア・イスラーム研究：“二項対立の構図”を越えて」

小林寧子
南山大学

東南アジアのイスラームに関する研究は、長い間二重に等閑視されてきた。ひとつには、東南アジア研究の中でイスラームが重要な問題としてなかなか認識されなかったことによる。戦後1980年代前半まではアメリカの地域研究が大きな影響力をもち、国境線を所与のものとして国単位で問題が捉えられ、限定された地域社会が考察の対象となった。そこでは東南アジアの独自性・特徴が強調された。東南アジアの人々の主体性が高く評価され、「自律史」的観点が強調された。ナショナリズムに関する研究が隆盛する一方、「外来」のものとされるイスラームに対する関心は希薄であった。また、イスラーム研究においても、やはり中東・西アジアが中心で、東南アジアは「周縁」として扱われ、地域的相違は「後進性」とみられることが多かった。

インドネシア・イスラーム研究に限れば、方法論上にも問題があった。当初の地域研究には比較・交流という視点が弱く、地域を越えて連動する問題をとらえきれなかった。インドネシア（特にジャワ）のイスラームは、ひとつの変種のようにしか見られなかった。また、ムスリム社会での日常観察からは、イスラーム法とアダット（慣習）、サントリとアバンガン、「近代派」（正確には「改革派」と「伝統派」、というように二項対立構図でムスリム実践がとらえられた。この構図の中では、「近代派」と呼ばれる運動に関心が集中し、「伝統派」は衰退するものと考えられ、ほとんど考察されなかった。欧米先進国が近未来と想定され、それをめざすと思われる運動が発展すると予想されたのである。この二項対立構図はムスリム社会を区分けすることに関心があり、その社会の発展をどこから見るかという視点がなく、また、対称的にとらえられたもの同士の相互作用には関心が払われなかった。

開発体制下で進行する近代化の中で、かつての近代化論に逆行してイスラーム化が進行し、さらに「伝統派」の中で革新的な動きが顕在化すると、従来の研究方法は大きく問い直された。イスラームそのものに関する知識が要求され、その発展のダイナミズムが注目された。同時に、イスラームのグローバル性が注目されるようになった。

このような視点から、1980年代末以降、タレカット（イスラーム神秘主義教団）と「伝統派」に関する研究が精力的に行われた。他のイスラーム地域との連動性、比

較を視野に入れてイスラームを考察する手法が導入された。特にイスラーム法に関連して、ファトワ（宗教裁定、法学見解）、思想、法制度に関する研究が進んだ。

「9・11 事件」以降の世界的なイスラームへの関心の高まりの中で、インドネシアのイスラームも急進派がスポットを浴びて、安易に暴力と結び付けられる傾向があるのは否めない。しかし、長いタイムスパンでイスラームの発展を考察する研究は着実に増え、イスラームの日常の実践の変容、多様な展開をとらえようとするようになってきた。

【必読文献】

・英語・インドネシア語文献

<半古典：～1980年代>

Geertz, Clifford. 1960. *Religion of Java*. Chicago : The University of Chicago Press.

Benda, Harry. 1960. *The Crescent and the Rising Sun : Indonesian Islam under the Japanese Occupation, 1942-1945*. The Hague/Bandung : Van Hoege. (復刻版あり)

Deliar Noer. 1973. *The Modernist Muslim Movement in Indonesia 1900-1942*. London : Oxford University Press.

Peacock, James. 1978. *Purifying the Faith : The Muhammadiyah Movement in Indonesian Islam*. Menlo Park : The Benjamin/Cummings Publishing Company.

Boland, B. J. 1982. *The Struggle of Islam in Modern Indonesia*. The Hague : Nijhoff, KITLV.

Nakamura, Mitsuo. 1983. *The Crescent Arises over the Banyan Tree : A Study of the Muhammadiyah Movement in a Central Javanese Town*. Yogyakarta : Gadjah Mada University Press.

<視座転換を促した研究：1990年代>

Bruinessen, Martin van. 1992. *Tarekat Naqsybandiyah di Indonesia*. Bandung : MIZAN.

—— . 1994. *NU : Tradisi, Relasi-relasi Kuasa, Pencarian Wacana Baru*. Yogyakarta : LKiS.

—— . 1995. *Kitab Kuning, Pesantren, dan Tarekat : Tradisi-tradisi Islam di Indonesia*. Bandung : MIZAN.

—— . 1998. *Rakyat Kecil, Islam dan Politik*. Yogyakarta : Bentang Budaya.

Azyumardi Azra. 1994. *Jaringan Ulama : Timur Tengah dan Kepulauan Nusantara Abad XVII dan XVIII*. Bandung : MIZAN.

Barton, Greg and Greg Fealy ed. 1996. *Nahdlatul Ulama, Traditional Islam and Modernity in Indonesia*. Clayton : Monash Asia Institute.

<最新文献：2000年代>

Bowen, John R. 2003. *Islam, Law and Equality in Indonesia : An Anthropology of Public Reasoning*. Cambridge : Cambridge University Press.

Feener, R. Mischael. 2007. *Muslim Legal Thought in Modern Indonesia*. Cambridge : Cambridge University Press.

Muhammad Hisyam. 2001. *Caught between Three Fires : The Javanese Pangulu under the Dutch Colonial Administration 1882-1942*. Jakarta : INIS.

Porter, Donald J. 2002. *Managing Politics and Islam in Indonesia*. London and New York : Routledge Curzon.

Noorhaidi Hasan. 2006. *Laskar Jihad : Islam, Militancy, and the Quest for Identity in Post-New Order Indonesia*. Ithaca, New York : Cornell University.

ICG Report(International Crisis Group, Sidney Jones)

・日本語文献

- 服部美奈. 2001. 『インドネシアの近代女子教育』勁草書房.
- 菅原由美. 2003. 「19世紀中葉オランダ植民地支配体制下のプリアイのイスラーム論：ジャワ北海岸におけるアフマッド・リファイ運動をめぐる言説を分析して」『東南アジア：歴史と文化』32:3-27.
- 福島真人. 2002. 『ジャワ社会の宗教と社会：スハルト体制下インドネシアの民俗誌的メモワール』ひつじ書房.
- 見市 建. 2004. 『インドネシア イスラーム主義のゆくえ』平凡社.
- 小林寧子. 2008. 『インドネシア 展開するイスラーム』名古屋大学出版会.
- . 2003. 「インドネシアのイスラーム伝統派の思想革新：アブドゥルラフマン・ワヒドの思想形成の軌跡」小松久男・小杉泰編『現代イスラーム思想と政治運動』東京大学出版会.
- 柳橋博之編. 2005. 『現代ムスリム家族法』日本加除出版.

第2報告

「フィリピンのムスリム，イスラーム研究： 主要研究とそのパラダイム」

川島緑
上智大学

フィリピンではムスリムは圧倒的な少数派であり，そのことがフィリピンのムスリム，イスラーム研究に重要な影響を与えている。第一に，文明化政策を推進した米国植民地政府，および，近代化・国民統合・開発をめざしたフィリピン政府は，基本的にムスリムを後進的な人々とみなしてきた。マニラの中央政府にとって，ムスリムやイスラームは第一義的に治安問題であった。第二に，フィリピンでは学術研究や出版活動が首都マニラに一極集中しており，南部イスラーム地域で活動するムスリム研究者は大きなハンディキャップを負っている。第三に，フィリピンでは社会科学の研究用語が英語であり，歴史研究でも欧文資料が偏重され，イスラーム地域の現地語やアラビア語などの資料が等閑視されている。

米国統治期には植民地行政の必要上，法や慣習の研究が行なわれた。サリービーは，ムスリム社会の宗教観念や宗教実践をイスラームと未開宗教に二分し，大半のムスリムは未開であり，「正しい」イスラームにより文明化可能と考えた。これは米国植民地統治の正当化論理である「恩恵的同化政策」と整合性を持つ考え方であった。

1950 - 80年代にかけては近代化論にもとづく研究が隆盛し，社会的動員と文化変容によってムスリムを近代化し，国民統合を達成することが論じられた。一方，ムスリム研究者により，イスラーム・アイデンティティを失うことなく近代化を達成することが可能であり，イスラームは近代化・開発の資源となるという主張が行なわれるようになった。マフルは「モロ戦争」を，スペインの帝国主義に対する抵抗運動と

して位置づけ、フィリピン・ナショナリズムに組み込むことが可能という考え方を示した。長期間の臨地調査にもとづく人類学研究も行なわれるようになったが、伝統と近代を二分し、イスラームを伝統として静的に記述するものが多かった。

1980年代以降、日常生活のなかのイスラームを動的にとらえようとする民族誌や、イスラーム教育、トランスナショナルな動き、市民社会、平和構築、ジェンダー、急進主義など、新しいテーマに取り組む研究が行なわれるようになった。しかし、それらの蓄積によっても、フィリピンのイスラームの全体の構図がつかめるようになったとは言い難い。現地語資料やオーラルヒストリーの手法も用いて歴史研究を発展させ、大きな歴史の流れを描き出すことが必要とされている。

【基本文献】

- Che Man, W. K. 1999. *Muslim Separatism : The Moros of Southern Philippines and the Malays of Southern Thailand*. Singapore : Oxford University Press.
- George, T. J. S. 1980. *Revolt of Mindanao : The Rise of Islam in Philippine Politics*. Kuala Lumpur : Oxford University Press.
- Gowing, Peter Gordon. 1979. *Muslim Filipinos : Heritage and Horizon*, Quezon City : New Day Publishers.
- . 1983. *Mandate in Moroland : The American Government of Muslim Filipinos 1899-1920*. Quezon City : New Day Publishers.
- 早瀬晋三. 2003.『海域イスラーム社会の歴史：ミンダナオ・エスノヒストリー』岩波書店.
- Horvatic, Patricia. 1994. Ways of Knowing Islam. *American Ethnologist*. 21-4.
- 石井正子. 2002.『女性が語るフィリピンのムスリム社会——紛争・開発・社会的変容』明石書店.
- Jubair, Salah. 1999. *Bangsamoro : A Nation under Endless Tyranny*. 3rd edition. Kuala Lumpur : IQ Marin.
- 川島緑. 2004.「南部フィリピン・ムスリム社会の山賊と民衆——「恐るべきラナオの王」の反乱」私市正年・栗田禎子『イスラーム地域の民衆運動と民主化』東京大学出版会.
- . 2007. Transformation of the Concepts of Homeland and People among the Philippine Muslims : The Bangsa Moro Revolution and Reformist Ulama in Lanao. In Kawashima et al. (eds.), *Proceedings of the Symposium on Bangsa and Umma : A Comparative Study of People-Grouping Concepts in the Islamic Areas of Southeast Asia*. Tokyo : Section for Islamic Area Studies, Institute of Asian Cultures, Sophia University.
- Majul, Cesar Adib. 1973. *Muslims in the Philippines*. Quezon City : Asian Center, University of the Philippine Press.
- . 1985. *The Contemporary Muslim Movement in the Philippines*. Berkeley : Mizan Press.
- Mastura, Michael. 1984. *Muslim Filipino Experience : A Collection of Essays*. Manila : Ministry of Muslim Affairs.
- McKenna, Thomas M. 1998. *Muslim Rulers and Rebels : Everyday Politics and Armed Separatism in the Southern Philippines*. Berkeley : University of California Press.
- McKenna, Thomas M. and Esmael A. Abdula. 2009. Islamic Education in the Philippines : Political Separatism and Religious Pragmatism. In Robert W. Hefner (ed.), *Making Modern Muslims : The Politics of Islamic Education in Southeast Asia*. Honolulu : University of Hawai'i Press.
- Milligan, Jefferey Ayala. 2005. *Islamic Identity, Postcoloniality, and Educational Policy : Schooling and Ethno-religious Conflict in the Southern Philippines*. New York : Palgrave

- Macmillan.
- Saleeby, Najeeb M. 1905. *Studies in Moro History, Law and Religion*. Manila : Bureau of Printing.
- . 1908. *The History of Sulu*. Manila : Bureau of Printing.
- Tan, Samuel K. 1977. *The Filipino Muslim Armed Struggle, 1900-1972*. Manila : Filipinas foundation.
- 床呂郁哉. 1999. 『越境 ——スールー海域から』岩波書店.
- Vitug, Marites D., and Glenda M. Gloria. 2000. *Under the Crescent Moon : Rebellion in Mindanao*. Quezon City : Ateneo Center for Social Policy and Public Affairs.

第3報告

「東南アジア・イスラーム教育研究の展開と可能性」

服部美奈
名古屋大学

本報告は、(1)「教育」という対象領域と当該研究における研究動向を議論の前提として整理し、次に(2)東南アジア・イスラーム教育研究の展開を具体的な文献とともに考察することを通して、(3)最終的に東南アジア・イスラーム教育研究の今後を展望することを目的とした。導入部分では、*Journal of Social Issues in Southeast Asia (SOJOURN)*, Vol.24, Number 1 (April 2009)に掲載された東南アジア研究で最も影響力のある文献45冊を紹介し、イスラーム教育関連では、Geertz [1960], Taufik [1971], Zamakhsyari [1982]だけが選定されていることを示した。

(1)では、「教育」という対象領域の特徴として、①「教育」は狭くも広くもなる対象領域である。つまり、教育事象を学校教育 schoolingあるいは教育機関 institutionに限定した場合と、人の生が織りなす相互作用 interactionの全体(どこで「教育的」作用が起こるかは実のところわからない)とした場合で、対象はかなり異なる。前者の場合は、学校教育制度やカリキュラム、授業、教師生徒関係など、いわゆる非常に教育的な内容を対象とすることになる。しかし、後者の場合は人類学や社会学などの社会科学に近づく、②「教育」は学問としての成立が危うい分野である。当為論としての教育(教育はかくあるべきだ。かくありたい)と、実証研究が共存し、多分に価値が含有されがちな領域である、③「教育」は政策科学的になる傾向(教育改革への提言)があり、「社会に役立つ」研究結果が求められることが多いことを示した。さらに現在、教育研究の傾向として、①教育事象を学校教育に限定し、さらに学校を社会から切り離して論じる傾向があり、②当為論と実証研究が共存し、③政策科学的・実用志向が強いことを指摘した。そして、この背景には世界規模での近代学校教育制度の浸透と研究者の学校教育への強い関心があることを示した。

(2)ではイスラーム教育研究の傾向として、①そもそも、東南アジア研究のなか

でイスラーム，さらに教育を対象にしている研究はそれほど多くなく（ただし9.11以降は状況が変化），特に途上国教育研究では教育の普遍化に重点が置かれてきた，②教育学分野は教育機関，人類学・社会学分野はより広い文脈で教育を捉える，②イスラーム大学の教育学部では当為論，またイスラーム教育思想に関する文献は翻訳本が相対的に多い（たとえば Abdullah Nashih Ulwan [インドネシア語版1993，アラビア語版1980] など）ことを指摘した。しかし，教育は国民教育制度や国家体制に大きく影響されながらも，「歴史的に集積されてきた生活文化との結びつき」[石附1996：20]の視点が不可欠であり，さらに教育をより広く知識の継承として捉える場合には，知識を継承するウラマーたちのネットワークや知識の伝播過程もイスラーム教育研究の範疇に含まれることになることを指摘した。加えて，9.11以降，にわかにもドラサなどイスラーム教育機関に関する研究が増加していることを指摘した（たとえば Hefner, R.W. [2007], Wadad Keds. [2007] など）。これは9.11以降，ムスリムの思想がどのように形成されるのかという観点からドラサなどの教育機関に注目が集まったことが背景にある。いずれにせよ，イスラーム教育を正面から扱った文献として注目に値する。

（3）では，東南アジア・イスラーム教育研究の今後として，①「近代」を問うイスラーム教育研究のさらなる重要性，②知識の伝播をたどるイスラーム教育研究の可能性を挙げた。①では近代における学校教育の発展の意味を，イスラームの視点から考察することの意義を示した。特に，国民国家形成期における学校教育化の過程で，各地域のイスラーム教育がどのように位置づけられたのか，イスラーム研究の観点からの新たな説明原理が必要とされている。②では，国家や民族の枠を越えたイスラームネットワークを通して伝播する知識の伝播の仕方，そしてそこで伝えられる信仰や価値を含む知識の形を，世界規模で考察することの現代的な意義を示した。そして，これらの研究には，現地語のみならずアラビア語の習得（もちろん現地語も），イスラーム教育思想あるいはイスラーム諸学に関する深い知識が必要とされる。

【必読文献】

・日本語文献

杉本 均 1996「高等教育における科学と哲学：アジア・イスラーム社会の視点——その2——」『京都大学高等教育研究』2：165-183.

杉本 均 1998「東南アジアのイスラーム高等教育機関の国家性と超国家性——インドネシアとマレーシアの比較より——」『京都大学教育学部紀要』44：65-85.

鈴木康郎 1999「南部タイの国公立小学校・中学校におけるイスラーム教育の試み」『比較教育学研究』25：97-115.

中田有紀 2005「インドネシアにおけるイスラーム学習活動の活性化——大学生の関与とそのインパクト——」『アジア経済』(46)1：32-52.

西野節男 1990『インドネシアのイスラーム教育』勁草書房.

Nishino Setsuo (ed.) 2006. *Mengasuh Santriwati —— Peranan Pesantren Sebagai Penjaga*

Tradisi, Lembaga Penelitian Kebudayaan Asia Universitas Toyo.

西野節男・服部美奈編著 2007 『変貌するインドネシア・イスラーム教育』 東洋大学アジア文化研究所.

服部美奈 2001 『インドネシアの近代女子教育——イスラーム改革運動のなかの女性』 勁草書房.

・英語・インドネシア語文献

[~1980年代]

Dawam Rahardjo, M. 1985. *Pergulatan Dunia Pesantren : Membangun Dari Bawah*. Jakarta : P3M.

Deliar Noer. 1973. *The Modernist Muslim Movement in Indonesia 1900-1942*. Kuala Lumpur : Oxford University Press. (Deliar Noer. 1980. *Gerakan Modern Islam di Indonesia 1900-1942*. Jakarta : LP3ES.)

Mahmud Yunus. 1957. *Sejarah Pendidikan Islam di Indonesia*. Jakarta : Mutiara Sumber Widya.

Roff, William R. 1970. "Indonesia and Malay Students in Cairo in the 1920s", *Indonesia*, 9:73-87.

Steenbrink, K. A. 1986. *Pesantren, Madrasah, Sekolah- Pendidikan Islam dalam Kurun Modern*. Jakarta : LP3ES.

Taufik Abdullah. 1971. *Schools and Politics : The Kaum Muda Movement in West Sumatra, 1927-1933*. Ithaca, N.Y. : Cornell Modern Indonesia Project, Cornell University.

Zamakhshari Dhofier. 1982. *Tradisi Pesantren : Studi tentang Pandangan Hidup Kyai*. Jakarta : Lembaga Penelitian, Pendidikan, dan Penerangan Ekonomi dan Sosial.

[研究の転換期：1990年代]

Van Bruinessen, Martin. 1995. *Kitab Kuning, Pesantren dan Tarekat : Tradisi-Tradisi Islam di Indonesia*. Bandung : Mizan.

[最新文献：2000年代]

Boyle, Helen. 2004. *Quranic Schools : Agents of Preservation and Change*. New York and London : Routledge Falmer.

Hefner, Robert W. (ed.) 2007. *Schooling Islam — The Culture and Politics of Modern Muslim Education*. Princeton University Press.

Milligan, Jeffrey Ayala. 2005. *Islamic Identity, Postcoloniality, and Educational Policy : Schooling and Etno-Religious Conflict in the Southern Philippines*. New York : Palgrave Macmillan.

Van Doorn-Harder, P. 2006. *Women Shaping Islam — Indonesian Women Reading the Qur'an*. Urbana and Chicago : University of Illinois Press.

Wadad Kadi & Victor Billeh. 2007. *Islam and Education-Myths and Truths*. Chicago : The University of Chicago Press.

第二部 「研究発表」

第1 報告

「マレーシアの改宗係争から見る民事裁判所とイスラーム法」

光成歩
東京大学大学院

2000年代以降、マレーシアでは「イスラームへの／からの改宗」をめぐる裁判係争が顕在化し、社会的な関心を集めている。マレーシアにおいては、イスラームへの／からの改宗は制度的な登録を必要とする公的屬性変更である。ムスリムと非ムスリムはそれぞれ別個の婚姻・家族法体系をもっており、いずれの体系においても非ムスリムとムスリムのあいだの婚姻は認められていない。よって改宗は、個人の宗教属性の変更であると同時に、改宗以前の夫婦・親子関係の変更を余儀なくさせるものとなる。しかし改宗という宗教行為がイスラーム行政またはイスラーム司法の管轄に付されるのに対し、改宗以前からの夫婦・親子関係の改宗を理由とする変更はイスラーム司法と一般司法のはざままで複雑な手続きに直面する。非ムスリムとムスリムのそれぞれの家族法規範は、その間の越境についての体系的な規範を持たないためである。この点において、マレーシアでは改宗の越境性が、宗教的な意味だけでなく制度的にも強調されることになる。

この状況は、シャリーア裁判所と一般裁判所の相互排他的な管轄という「二元的司法」によってさらに複雑化する。個人の宗教属性の変更という改宗手続きの核心部分はイスラーム司法・行政の管轄に付され、一般裁判所はシャリーア裁判所の管轄に属する事項に関する管轄権をもたない。このことは、配偶者もしくは親子など改宗者自身以外の関係者が改宗の是非を争うことをきわめて困難にする。他方で、改宗以前の夫婦・親子関係の調整は改宗という「事実」にもとづいて一般裁判所もしくはシャリーア裁判所において進められることになる。このような制度的状況は、たとえば改宗者が故人もしくは未成年の子供で、訴えの主体が非ムスリムとなる場合にはとくに問題となる。非ムスリムはシャリーア裁判所ではなく一般裁判所において改宗の適法性や真偽を問おうとし、それが往々にして裁判管轄の壁に阻まれるからである。

本発表では、このような問題意識のもと、夫の生前のイスラーム改宗の真偽をめぐって訴えを起こした妻カリアマルの係争と、イスラームに改宗した夫による未成年の子供の改宗に異議を申し立てる妻シャマラの係争に注目した。これらの係争は一般的に、シャリーア裁判所の改宗に対する管轄ゆえに一般裁判所の管轄が否定される「管轄問題」、それによる非ムスリムの権利行使の不可能性の問題と捉えられている。

本発表では、改宗係争が不可避免的に管轄問題を含みこむ制度的な仕組みを解明するとともに、さらに管轄を決定する際の一般裁判所判事の論理から、改宗係争における管轄の振り分けがどのような規範にもとづき、どのような形で決着しているのかについて考察を行った。

第2 報告

「現代インドネシアにおける中東留学経験者のもたらす影響： エジプト・アズハル大学出身イスラーム知識人の事例から」

木下博子
京都大学大学院

本発表では、アズハル大学出身のイスラーム知識人が、現代インドネシア社会のイスラーム化に与える影響を、彼らが構築するネットワークの分析を通じて明らかにする。

具体的には、インドネシアと中東地域のあいだに16世紀後半から形成されてきた知的交流回路を往来する学生らに着目し、彼らが留学中に構築する人間関係をネットワークとして捉える。このネットワークを通じて展開される相互交渉のあり方を考察することで、彼らの帰国後のキャリアパスと、社会のイスラーム化におよぼす影響を解明する。

対象とするのは、最大のインドネシア人留学生をかかえ、10世紀以上に渡りイスラーム諸学の中心とされてきたカイロのアズハル大学への留学生である。本発表では、次の二つの側面に着目して議論を進める。第1に、現代カイロにおけるインドネシア人アズハル大学留学生の生活実態を明らかにし、第2に、アズハル大学出身の元留学生が、帰国後にインドネシア社会のイスラーム化に与える影響を、彼らが構築したネットワークとそれをもとにしたキャリアパスを分析することで明らかにする。

第1のカイロにおける留学生の実態については、インドネシア人留学生は、出身地ごとに自助組織が結成されていることを明らかにする。これは、インドネシア人留学生は、出身地方の自助組織内において、他地域出身の学生との交流が僅少な閉鎖的ネットワークを構築している、と整理できる。

しかし、こうしたネットワークの閉鎖性を架橋する行為も確認される。各組織の中には、他組織の学生とも積極的な交流を行い、越境的なネットワークを構築している学生が少数存在する。越境的ネットワークは、出版活動とセミナー、ディスカッションを通じて構築される。彼らは定期刊行物への寄稿、多様なセミナーへの参加によって、他組織の学生との相互交渉を行う。彼らは思想や態度の異なる多くの学生との交

流を通じて、プサントレンでの生活では知り得ることのなかったインドネシア・イスラームの多様性を発見し、同時に自身の組織へとそれらの情報を持ち帰ることで、閉鎖的なネットワーク内の学生らもインドネシア・イスラームの多様性を発見していることが明らかとなった。換言すると、これら少数の学生は、外部にも多様な繋がりをもつハブとしての役割を果たしている。

第2の帰国後の社会に与える影響力の分析では、主としてナフダトゥル・ウラマー系の若手イスラーム知識人らの活動を考察する。彼らは留学当時、上記の越境的なネットワークを構築していた学生、つまりハブであった。帰国後は、カイロで構築したネットワークに依拠し、カイロで発見したインドネシア・イスラームの多様性を取り込みながら、それぞれのキャリアを積んでいることが明らかになった。若手イスラーム知識人らの活動をカイロで構築されたネットワークにまで遡って考察することにより、彼らがインドネシア社会の草の根のイスラーム化を目指していることが明らかとなった。

第3報告

「フィリピン・マニラにおけるイスラーム改宗女性の連帯と活動 (序説)」

渡邊暁子
東洋大学

フィリピンのムスリムは全人口の5～8パーセントを占め、またその人口も13の言語民族集団から成ると一般に認識されてきた。近年、これに加え、新たに改宗した人びとをバリック・イスラーム Balik-Islam (「イスラームに戻る」の意) と称してフィリピン・ムスリムの14番目の集団としてみなす傾向にある。

本発表の舞台となるマニラのムスリム・コミュニティは、従来はミンダナオからの紛争・経済移民の移動先として捉えられてきたが、80年代以降は中東・湾岸諸国への中継点という位置づけを強めている。そこには、海外就労を繰り返すムスリムが滞留しているだけでなく、アラブ諸国への出稼ぎによってイスラームに改宗した者や、ムスリムとの婚姻によって改宗した者も居住している。こうした首都圏各地における集住地区の形成は、キリスト教徒に囲まれたマニラ社会のなかで、ムスリムとして生きやすい場を求めた結果であろう。

本発表では、マニラの特定のムスリム・コミュニティを対象とし、そこに居住するイスラーム改宗女性に焦点を当てる。彼女たちの宗教的活動および社会経済的な連帯について概観し、その活動が当該社会の展開とどう関わってきたのか、またそのこと

が彼女たちの自身に対する認識にいかなる影響を与えているのかといった点について、考察を行った。

フィリピンにおけるイスラーム改宗女性人口の増加は、ミンダナオ紛争や大規模な労働力輸出現象と関係しており、婚姻を契機に、あるいは自身の国内外での経験と意志によって改宗した女性がほとんどである。イスラームに対する姿勢は、改宗の経緯や周囲の影響、本人の意思などにより、さまざまである。

とくに熱心なイスラーム改宗女性の活動のなかで特徴的なのが、タァリム Ta'lim とよばれる勉強会と、マストウラット Masturat とよばれる布教活動である。マストウラットは、パキスタンを発祥とするタブリーグ運動 Tabligh Jamaat の女性版であり、タァリム出席者の一部が任意により加わる場合が多い。調査地では、こうしたイスラーム復興運動に改宗者だけでなく民族ムスリムの女性も参加しており、その数は年々増加している。

民族ムスリムが主流を占めるこの社会では、親族や姻族の関係、広義には郷里のつながりが紐帯の基盤となっている。他方、改宗者たちは、出身地域や背景も多様であるために、まとまりをもつ機会が少ない。加えて、フィリピンのムスリム社会のなかで、彼女たちは「元キリスト教徒」として低くみられる傾向にある。そうしたなか、タァリムやマストウラットといった活動は、改宗者女性に居場所や相互扶助の関係を与えるだけでなく、民族ムスリムと対等に立ち、ときには、ともすれば民族ごとに分断され、「ローカルなイスラーム」しか知らない彼女たちを啓蒙しているという自負を持たせるものとなるのである。

(文責：小林寧子)

東南アジア・イスラーム研究の新しい展開へ向けて



小林寧子センター研究員



川島緑氏（上智大学）



総括討論



会場の様子